高桑さんのおかげで再び虫屋に

青木淳一

高桑さん，あなたは僕よりも 12 歳も年下なのに，もう先にあの世へ旅立ってしまいましたね．いくら冗談が好きなあなたとしても，冗談が過ぎますよ．どんなに多くの人たちが悲しんでいることか．

高桑さんが亡くなる 10 日ほど前に電話で話しましたね．蝶の英名について，あなたに教えてもらいたかったからです．そのときにあなたは「膵臓の尻尾のところに変なものがあるんですよ」と言っていましたが，その声は元気そうでもあり，また困ったような，とぎれとぎれの喋り方でしたね．それがあなたの声を聞いた最後になるとは思いもしませんでした．

高桑さん，あなたは異色の昆虫学者でしたね．卒業したのが東京都立大学の経済学部．将来の職場が卒業した学部によって縛られてしまうことの多い日本で，理学部でも農学部でもない学部の出身者でありながら，よくぞ昆虫学者になられましたね．それはあなたの能力, 努力, 研究成果がいかに立派であったかの証拠です．そのような人は，私の身近では，東京大学文学部独文科を卒業，東大の人類学の教授になった尾本恵市さん, 学習院大学法学部を卒業し，国立科学博物館研究主幹になったクモ学の大家，小野展嗣さんなど，わずかしか知りません．

あなたの場合にはいったん神奈川県の職員（自然保護課）になったことが，博物館の研究職になるための良いステップになったのかもしれません．その念願がかなった時のあなたの様子を今でも覚えています．まるで水を得た魚のように元気溌剌としていましたよ．そこであなたはプロの昆虫学者として活動しながら，同時に大勢のアマチュア昆虫愛好家の中にどっぷりと漬かったまま，その付き合いを大切にし，大いに楽しみながら業績を上げていきました．愛好家の多いカミキリムシ科の分類分布．研究者の少ないハナノミ科の分類による博士号の取得，チョウに関する詳しい知識，昆虫の擬態に関する考察，外来生物に対する真剣な取り組みなど幅広い分野で活動してきましたね．

高桑さんの活動の拠点，神奈川県立生命の星・地球博物館に私が館長として赴任してきたのは 2000 年の春でした．それにあたっては新堀豊彦先生と高桑さんの強力な後押しがあったのでした．私の横浜国立大学停年退官と時を同じくしていました．

私は「非常勤館長」でしたが，学芸員からは「非常識館長」と言われていましたよね．なぜなら，館長職に徹しなければいけないのに，館長室に顕微鏡を持ち込んで，暇があればダニの記載をやっていたからです．しかし，実のところは高桑さんや苅部さんが楽しそうに虫をいじっているのを横目で見て，うらやましく思っていたのです．なぜなら，私は小学校から高校生まで熱心に虫採りをしていたからです．そして，とうとう昔の昆虫少年に戻って虫採りを再開したのです．あなたのせいですよ. 50 年続けてきたダニの研究から足を洗って，昔から好きだったホソカタムシの研究を再開した私はそれまで日本から 35 種しか知られていなかったホソカタムシを 63 種までに増やし，15 種の新種を記載することができた．私が新種記載したササラダニは 450 種余りに達し，それには及ばないが，ダニではなく甲虫で新種を記載できたことが何よりもうれしかった．これも高桑さんの甲虫界への無言の誘惑のおかげです．

高桑さんと一緒に採集に行った回数は少ないのですが，一番印象に残っているのはニューギニア（西パプア）です．首狩り族が居住する標高 1,200

写真1．西パプア高地のメニ村.

写真2．捕まえたクスクスが料理される前の姿を複雑な表情で見守る高桑さん.

m のメニ村から 2,000 m のアルファック山までを中心に 10 日間の調査でした．もちろん，高桑さんと私の目的は甲虫類でしたが，あなたはトンボを見かけると苅部さんの顔を思い出すらしく，懸命に走って追いかけていましたね．そのため，切り株につまずいて足を怪我し，激痛をこらえながら「採ったぞ！」と叫んでいました．あなたは，えらい！あなたも私も酒好きなのに，イスラムの世界では禁酒．10 日間山にこもっている間は二人とも一滴も飲まなかったのに，どうにか耐えられました．山から下りてやっと缶ビールを手にした二人，「ぼくたち，アル中ではなかったね」と乾杯したのを覚えていますか．

格好いい甲虫，たくさんの友人たち，それにお酒．楽しい人生でしたね．

（横浜国立大学名誉教授，元神奈川県立生命の星・地球博物館館長）

高桑さんはいつも仲間と一緒だった

伊藤 弥寿彦

高桑さんに初めて出会ったのはボクが小学 5 年生（10 歳）の時で，生涯忘れられぬその時の思い出は，月刊むし 417 号（2005 年 11 月・カミキリ特集号）の今月のむし「オニホソコバネカミキリ」に書いた．他にも高桑さんとの思い出を書いたことはあって，それは彼の周りにいた多くの虫屋さんも同じだと思う．2008 年に還暦の記念として刊行された「高桑正敏の解体虫書」という珍本があるからだ．この世の物とは思えぬハデトラ（ミイロトラ）カミキリの格調高い絵で飾られた表紙の本の中で，沢山の人が高桑さんとの思い出を語っている．実際この本を見れば，高桑さんの虫屋人生の全てがわかってしまう．高桑さんは多くの方々に愛された昆虫界のスーパースターだが，それにしても生前に仲間によってこんな本が作られてしまった虫屋というのは空前絶後のことだろう．この見事な「解体虫書」を企画したのは「華飲み会」と銘打った虫仲間で，その中心は藤田宏さん，苅部治紀さん，中村進一さん，丸山清さんだった．高桑さんは人垂らしで，同時に良き後輩に恵まれている方だった．特に藤田さんという存在は決定的だった，と思う．ボクは子供の頃から二人を眺めていたが，それは心

写真1．1976年牛歩会．

写真2．1978年木曜サロン．

写真3．夢虫の会採集会の高桑さん．

写真4．弥彦山のコブヤハズカミキリ．